第六十三章　ウソ

第六十三章　ウソ

【時・空】永久０２４６年　摩周クレーター
　　永久０２５５年　前線第四コロニー
【人】ノロ　瞬示　真美　住職

永久０２４６年

＊＊＊

ノロは時空間移動装置の中で幸せそうな表情をしたまま気を失っている。しばらくすると晴れ渡った朝を迎えたようにすがすがしい大きなあくびをして小さな目をうっすらと開ける。そして顔をあげてにっこりと笑う。

「いい夢を見た」

上体を起こすと、透過キーボードに短い指を静かに載せる。すぐさまモニターに反応が現れると、メガネに心地よい反射光が映る。そのとき足元のズタ袋があやしく輝きだす。

「あの本だ！」

ノロはあせることなくズタ袋から本を取りだすとぱらぱらとめくる。活字が現れては消える。やっとあるページでノロはなんとか活字を追跡する。

「……ここは巨大な鍾乳洞（しょうにゅうどう）。長い年月をかけて……」

「……首から上ができあがるのにまだ数百年、数千年、数万年を要する……」

第六十三章　ウソ

「……水面は波をたてながら上昇し人間の形をした……」
「……洞窟の外はすべて秋の澄みきった空のような……」
「……ふたりは黄色い水を引きつれて滝の流れから分離して……」
「……碁盤の目のように白い線で区切られた青い空が……」
――ネオンサインみたいに文字が消えたり現れたり。こんな本を読んでいると目が悪くなる
目をこすりながら大声で笑う。
「俺の目は元々悪いのだ。これ以上悪くなることはない！」
腰を据えて本と向きあう。
「……川の流れが逆なのだ！低いところから高いところへ水が流れて……」
「……山門がミシミシと音をたてながら……」
「……ふたりの歩調に合わすように山門が徐々に姿を……」
「……洞窟に達すると突然目の前の水がすべて赤い色に……」
ノロの手が止まる。文字が消えて白紙のページが続く。
「時間が不安定なのか」
本を閉じると目も閉じる。
「まるで強烈な時震に襲われたような雰囲気だ。まあ、未定稿ということか」
ノロは急に思い出したようにモニターをのぞく。

「ところで、今、俺はどこにいるんだ」
屋根が草におおわれた小さな山門と背の高い杉の木が規則正しく並んだ小径が見える。
「しまった！先に場所を確認しておけば瞬示と真美を見つけることができたのかも。せっかくこの本があのふたりの居場所を教えてくれていたのに」
透過キーボードを消すとコントロールパネルを操作してまわりの状況を観察する。そしてある一点をズームアップする。
「洞窟だ。あそこから赤い水が吐きだされたのか」
時空間移動装置が崖の洞窟に移動する。
「狭いな。中に入るには時空間移動装置を降りなければ。あのふたりはこの洞窟に入ったに違いない」
洞窟に入る決心をするが、その前に崖の上を確認するために時空間移動装置を上昇させる。
「これは！」
モニターには広大な円形の湖が広がっている。ノロはこの湖が摩周クレーターと呼ばれていることを知らない。その湖の中央部に島がある。さらに高度をあげると、その島の真ん中に丸い池があって仰向けに浮かぶ巨大土偶が見える。
「なぜ、こんなところに遮光器土偶のお化けが？」
腕時計を見直す。

「永久０２４６年」
高度を下げようとしたとき巨大土偶に人影を発見する。
「わあ、瞬示と真美がいる！」
あわてて時空間移動装置の高度をあげると巨大土偶の丸い目がうっすらと開く。
「巨大土偶が泣いている。何が起こるんだ？」
そのときコントロールパネルの横に置いていた本がバタッという音をたてて落ちる。ノロはモニターから目を離さずに短い足で床に落ちた本をたぐり寄せようと背筋をぴーんと伸ばす。
瞬示と真美がゆっくりと巨大土偶の胸に降りていく。そのわずかな間に巨大土偶の目の輪郭が溶けるようにくずれる。そのとき伸ばしすぎたノロの足がケイレンする。
「巨大土偶が……」
瞬示と真美が巨大土偶の胸に着地する。胸を通りぬけてふたりはそのまま沈む。巨大土偶の表面は濡れた薄い紙のような感じがする。ふたりが上昇すると目はおろか顔全体が溶けだす。胸もふたりが足を着けたところから溶けて黄色い池の水だけが残る。しばらくするとその池の真ん中あたりがゆっくりと盛りあがる。池はまるで少女の薄い胸のように盛りあがったまま止まる。
ケイレンが続く足元で本が黄色に輝きだす。ノロは録画モードにすると本を拾いあげて特に強く輝いているあたりのページを開く。

「文字が！」
文字が鮮明に現れる。やっとケイレンがおさまったノロは文字を追う。
「今、目の前で起こっていることがこの本に書かれている！」
ノロは直感的に理解すると読み上げる。

＊＊＊

【御陵で戦った巨大土偶は、今溶けて消えてしまった巨大土偶とどんな関係があるんだろう】
【瞬ちゃん！聞こえる！】
【えっ】
【聞こえるわ】
【あれよ】
【子供が生まれる前に死んでいく】
【何万、何億、何兆と死んでいく】
【永遠に生きるために死んでいく】
【子供のいない永遠の世界】
【男女のいない永遠の世界】
【教えてください】
【ダメだわ】

【自分たちで考えろということか】
【『子供が生まれる前に死んでいく』って、生命永遠保持機構の本部で見たガラスの容器に入っていた胎児のことを示しているのかしら】
【リンメイが必死に手術を施しても、子供は母親の身体から生きて出てくることはなかった】
【『何万、何億、何兆』回、努力しても死産になってしまう、悲しいことだわ】
【『永遠に生きるために死んでいく』はよくわからないなあ】
【住職、それにサーチやホーリーが言ってたように、人間が永遠の生命を持ったから子供は生まれないという意味なのかしら？】
【永遠の命を持っている人間が誕生しようとする子供を殺してしまうということかもしれない】
【そうなのかしら。そうだとしたらむごいわ。いえ、むごすぎるわ】
【でも生体内生命永遠保持手術ではまったく逆だった。あの手術で生まれてきた子供は母親どころか、巨大土偶に成長して女を次々と殺していった】
【どちらにしてもむごい。むごいわ！】
【次の『子供のいない永遠の世界』は何となくわかる】
【そうね、最後の『男女のいない永遠の世界』は？】
【男も女もいない、みんな殺し合っていなくなる。それでも世界は永遠に時を刻むということ

では】

【そうじゃないと思う。でも、よくわからないわ】

【住職に聞いてみよう】

文字はここで消える。

＊＊＊

「時間島、リンメイ、住職、胎児？それになんだっけ、関ヶ原の御陵で聞いた意味深（いみしん）な言葉」

ノロは思い出したようにモニターをのぞきこむ。もう瞬示と真美はいない。仕方なく録画したものを再生してみる。

黄色い池の真ん中にゆっくりと降下する瞬示と真美の姿が映る。ふたりの身体から衣服が溶けるように消える。そしてふたりの身体そのものも溶けて消える。

「どういうことだ！」

ノロが叫んだのと黄色い水のような物体が消えたのが同時だった。

「もしかして、あれが時間島なのか」

ノロはモニターから視線を外すと必死でめくるが活字のページはない。あきらめて床で大の字になると警報が鳴る。

「なんだ、なんだ」

不機嫌そうに起きあがるとモニターを眺める。例の丸い池があったところから何本かの黄色

いヒモのような筋が空に向かって伸びている。ヒモといってもその直径は数十メートルある。
ノロは操縦席に座ると池の上空に移動する。そのとき一本のヒモに時空間移動装置が接触する。
「しまった！」
時空間移動装置はヒモの中に吸いこまれて光速をはるかに超えるスピードで無限の長さを持つトンネルの中を移動する。操縦席のモニターに表示された時計や空間座標を示す部分は真っ白に輝くだけで何も表示されない。
「これは時空間移動じゃない！次元移動だ！時空間移動装置内の時間をロックしなければ！」
ノロは小さな目を精一杯見開いてモニターを見ながら、コントロールパネルの上で忙しく指を移動させる。やがてモニター上に現れた時計が永久０２５５年を示し、空間座標を示す数字が安定する。ふきだす額の汗を袖でぬぐう。
「フーッ、なんとか時空間移動装置内の時間をロックできた」
最悪の状況に対してノロは本能的に最善の方法で対処した。
「時間をロックせずに次元移動するといったん因果を清算しなくてはならない。そうなったら、生命永遠保持手術の効果が消滅してしまうかもしれない」
なんと、ノロは次元移動、すなわち時間島に包みこまれると生命永遠保持手術の効果が消滅することを知っていた。
ノロは操縦席のうしろにある埋込式の収納庫を開ける。中には食料が入っている。

「ありがたい！イリのプレゼントだ。何が起きるかわからない。とりあえず食えるだけ食っておこう」

勝手にそう思いこむと全部食べてしまう。

永久０２５５年

＊＊＊

満腹になったノロは次元移動したと確信する今いる宇宙空間を調査しはじめる。すぐに見覚えのある星を発見する。ノロの頭は満腹になると眠くなるのではなく活発になる。

「あれは、確か……前線第四コロニーでは？」

モニター全体に黄色い星が大写しされている。

「やけに黄色いな。星が黄だんになるなんて聞いたことがないなあ。それにしても、なぜここにいるんだ」

ノロはすぐさま識別信号を送る。一呼吸もおかずに信号が返ってくる。

「こちらは前線第四コロニーの中央コンピュータです」

「やっぱり！俺だ！ノロだ！」

ノロが歓喜して大声をあげる。

「ノロ。ワタシの制作者」

コントロールパネルの上に透過キーボードが現れるとノロはすさましい勢いで打ちまくる。
「ＩＤとパスワード、確認しました」
前線第四コロニーが徐々に元の茶色に戻ってゆく。
「おい、なぜ黄色い化粧をしてたんだ。気分転換か？」
「いいえ、ほんの少し前まで、時間島に包まれていました」
「時間島だって？」
「そうです。ふしぎな時空間移動装置です」
ノロが前線第四コロニーの中央コンピュータの見解を否定しようとしたとき、目の前のモニターに前線第四コロニーのまわりの状況が映しだされる。
「なんだ、なんだ！これは？」
黄色に染まった完成コロニーが次々と前線第四コロニーの周辺の宇宙空間に出現する。
「宴会でもするつもりか？」
「時間島によってすべての完成コロニーがこの周辺に集められています」
「男の軍隊の完成コロニーも女の軍隊の完成コロニーもか？」
「そのようです」
「決着をつけるために総力戦をやろうとしているのか。それとも停戦会議でも開くのか？」
「どちらでもないと思います。強制的に時間島によって集められているだけです。前線第四コ

ロニーもこの時空間に強制的に時空間移動させられました」
「時間島に……？」

＊＊＊

ノロの時空間移動装置が前線第四コロニーの中央コンピュータ室の近くにある特別な格納室に現れる。ノロはドアを跳ねあげると腕時計を見ながら中央コンピュータ室に向かう。
「永久０２５５年か」
中央コンピュータ室のドアが横にスライドするとノロがうれしそうに大声を出す。
「久しぶりだな」
ノロが壁に埋めこまれた大型モニターの前に座ると透過キーボードが浮きあがる。そして目にも止まらぬ速さでキーボードをなでる。
「管理者としてのログインを許可します」
「当たり前だ。俺が造ったコンピュータじゃないか。管理者じゃなくて制作者としてログインしているんだ……」
ノロは時間がたつのも忘れて忙しく入力を続ける。ときどき休憩するようにモニターを見つめると肩で息をしながら再び入力を続ける。中央コンピュータにつながるケーブルが強く輝く。一時間ほどたってノロは満足げに背伸びをする。
「ところで、ここに次元移動させられたのはこの前線第四コロニーをのぞいてすべて完成コロ

ニーばかりだ。なぜだ」
ノロは前線第四コロニーの状況を調べる。
「なんだ、なんだ、なんだ！」
モニターを見ながら叫ぶ。
「なんと、ここに瞬示と真美がいる。ホーリーもいる。どうなっているんだ」
ノロがフーッと息を吐きだすと中央コンピュータに向きなおって命令する。
「このコロニーの現場の責任者は」
「Ｒｖ２６です」
「アンドロイドか。Ｒｖ２６に瞬示と真美という人間をここへ連れてくるように命令しろ」
「今は無理です」
「なぜだ」
「これを見てください」
中央コンピュータとノロの間にさほど大きくない浮遊透過スクリーンが現れる。ある完成コロニーで繰り広げられている男の兵士と女の兵士の壮烈な戦闘が映しだされる。
「相変わらず、あきもせずに戦争ごっこをしている」
「今、時間島によってこの付近に集められたすべての完成コロニーで、このような戦闘が繰り広げられています」

「あっ、シェルターがぶっ壊れた。みんな死んでしまうぞ！」
ノロが口元を引きしめて浮遊透過スクリーンを見つめる。
「ライフルレーザーから発射されたレーザー光線がコントロールされていない」
今度は口をあんぐりと開ける。
「と言うことは、生命永遠保持機能が働いていないということか」
「時間島に包みこまれると人間は生命永遠保持手術の効果を失うようです」
「俺の思っていたとおりだ」
ノロは先ほどまで座っていた机に向かうと透過キーボードを激しくたたきだす。
「なんということだ！」
ノロは汗をぬぐうと放心状態になる。
「Ｒｖ２６に命令を受けいれる余裕ができたようです。瞬示と真美をここへ連れてくるように指示します」
ノロがはっとして我に返る。
「住職という人間もいたらそれも頼む。えーとそれにホーリー……、邪魔くさい、全員だ」
「相変わらず、いい加減な命令を連発しますね。理由はどうしますか」
「適当でいい」
「理由がないのに呼びだすことはできません」

第六十三章　ウソ

ノロは隠れる場所を探すために中央コンピュータ室のあちらこちらを見渡す。
「だから、適当に」
ノロはなんとかしろと言わんばかりの表情をしながら隠れる場所を探す。
「わかりました。適当にウソの理由を作成しろということですね」
「なんでもいい。えーと、どこか隠れる場所はないか」
「隠れる場所？隠れてどうするのですか」
「様子を見たいんだ。とにかく、どこか……」
「隣のコンピュータルーム環境制御室はいかがですか」
ノロが中央コンピュータ室の奥のドアに向かうとまたしても中央コンピュータがノロに質問する。
「命令を実行しますが、ウソの理由を作成するには相当な時間がかかります」
「量子コンピュータならできる。トレーニングだ。じゃあ」
ノロが隣の部屋に消える。そのあと中央コンピュータのため息が部屋中に充満する。ノロは前線第四コロニーの中央コンピュータにウソをつくように命令したことに気が付かない。

＊＊＊

前線第四コロニーの中央コンピュータ室で瞬示、真美、ホーリー、サーチ、住職、リンメイの会話が一巡したところで、真美が住職に近づく。

「この言葉の意味、わかります？」
中央コンピュータ室の隣の部屋で様子をうかがうノロはいよいよ核心的な話が始まると興奮する。
すぐに真美の歌うような言葉が聞こえてくる。
「子供が生まれる前に死んでいく」
「何万、何億、何兆と死んでいく」
「永遠に生きるために死んでいく」
「子供のいない永遠の世界」
「男女のいない永遠の世界」
――例の呪文だ！
ノロは身を乗りだしてモニターの目を閉じた住職に注目する。
「悲しい呪文（じゅもん）じゃ」
しばらくして住職がゆっくりと目を開ける。
「ＣＯＳＭＯＳという言葉を知っておるか」
「コスモス、宇宙のことですね」
真美が答える。
「一般的にはそうじゃ。前とうしろに分けてみる」

「ＣＯＳとＭＯＳ」
真美が住職の言うとおりに答える。
「さらに前の部分を分けてみる」
「ＣとＯＳ」
「そうじゃ。ＣはＣｈｉｌｄ、子供、子孫のことじゃ」
瞬示が住職と真美の会話に割りこむ。
「ＯＳはオペレーティングシステムのことですか」
住職が瞬示の言葉に大きくうなずく。
――読めたぞ！住職の言いたいことが！
ノロは興奮して手足をバタバタさせる。
「ＭＯＳはＭとＯＳに分かれる」
住職が真美に答えをうながす。
「ＭはＭａｎですね」
「そうじゃ。人間、大人そして親を意味するのじゃ」
「子供と大人？子供と親？」
「ＣＯＳＭＯＳという言葉は、人類を宇宙の中心に見すえるとそういうことになる」
「子供と大人のオペレーティングシステムが宇宙ということかしら」

「子孫が誕生する仕組みと、成長して生命として形を整える仕組みが、この宇宙の本質じゃ」
ノロは住職の一語一語をもらすまいと神経を集中させる。
「宇宙は生命が永遠につながった状態を言うのじゃ。このシステムがない宇宙は宇宙ではない！」
住職の言葉が少しうわずる。
「生命の存在しない宇宙にはこの『ＣＯＳＭＯＳ』というオペレーティングシステムは存在しない！」
住職は言葉を切って、みんなを見渡す。
「ノーオペレーティングシステム、『ＮＯＳ』と書いてノスと呼ぶ」
――ノス！なるほど
ノロが手を打つ。
「ＮＯＳの宇宙は宇宙ではない。ＮＯＳは無情の世界なり」
住職が短い言葉をゆっくりとつないでいく。
「生命の存在しない宇宙」
「先に死がある因果のない世界」
「そのような死がいくら積まれようとも、この宇宙に生命は存在することはない」
「永遠に死の世界じゃ」

「そこには何も存在しないのじゃ」
「じゃが、逆に子孫を絶やすことがなければ永遠の世界になりうる」
ここで住職が一息つく。そして表情をゆるませる。
「因果律を無視した人間に対する戒めじゃ」
「永遠に死んでは永遠に生まれる。本来、宇宙は未来永劫（えいごう）の世界じゃ」
「人間はノスの世界に踏みこんでしまったのじゃ」
「子供が生まれる前に死んでいくとすれば、それは生まれないのと同じことじゃ」
「何万、何億、何兆と死んでいくということは、永遠につないでつないで生きるために死んでいくことを意味するのじゃ」
「子供のいない永遠の世界はノスの世界」
「男女のいない永遠の世界もノスの世界。何もない宇宙のことじゃ」
住職は自分の頭をスルッとなでてから、考えを丸めようと天井の中央コンピュータを見つめる。
「今までの思考をまとめてみよう。永遠の命を手にすることの危うさを警告しているのじゃ。男と女の形をしているだけで子供を造ることなく、生き続けようとする人間は、時間も空間も存在しないノスの世界に幽閉されたようなものだと言いたいのじゃろ。短い言葉じゃが、宇宙の摂理を実に巧みに表現しておる」

Ｒｖ２６が住職に近づく。
「ヨク、ワカリマシタ」
モニターを眺めるノロは手を打ってＲｖ２６に拍手を送る。
瞬示たちが中央コンピュータ室から出ていくとノロが現れる。
「Ｃ・ＯＳ・Ｍ・ＯＳか。あの住職という人間はなかなかの才覚者だ。あんな人間を見たのは初めてだ」
ノロは中央コンピュータ室の片隅の机に向かうと透過キーボードをなではじめる。
――やっぱり、あのふたりは人間じゃない。人間の格好をしているが、人間じゃない。ただ、本人たちはそのことに気が付いていない
ノロは瞬示と真美が六次元の生命体であると確信する。
「俺のリクエストしたデータは？」
「ノロの時空間移動装置に転送しておきました」
「邪魔したな」
「どこへ行くのですか」
「わからん」
ノロは中央コンピュータ室を出ると走りだす。時空間移動装置に乗りこむとすぐに本を開く。表紙を見ると、「Ｃ・ＯＳ・Ｍ・ＯＳ」と書かれている。ノロは大きな期待をもって本を開く。

しかし、その期待とは裏腹に開けたとたんに文字が次々と消えてゆく。本を閉じて表紙を確認する。
「C・OS・M・OS。この文字だけは消えない」
ノロは本をコントロールパネルの横に置くと大きくノビをする。
「まだ物語が完成していないんだ。しかし、確実に一歩前進した」
ノロはウトウトすると操縦席で眠ってしまう。

＊＊＊

ノロは前線第四コロニーの中央コンピュータの声で目を覚ます。
「緑の時空間移動装置と青の時空間移動装置が相前後してこのコロニーに到着しました」
「どういうことだ？」
「どうやら、ここでカーン将軍とキャミ将軍が停戦会議を開くようです」
ずれた身体を伸ばしてノロは操縦席に座りなおす。
「やっとわかったようだな。これでバカな戦争が終わるかもしれない」
ノロは時空間移動の準備にかかる。
「見届けなくてもいい結論が出るはずだ。ここまで切羽詰(せっぱつ)まれば和解するしかない」
操縦レバーを引くと時空間移動装置が回転を始める。
「永久０２５５年。歴史に残る年になるかもしれない。瞬示と真美のおおよそのことがわかり

かけてきた。いずれこの本が俺に詳しいことを教えてくれるはずだ。問題は巨大土偶の方だ」

ノロはコントロールパネルに指を無造作に置く。

「さあ、どうしよう?とりあえずランダム時空間移動だ」

ノロは前線第四コロニーの中央コンピュータに行く先を隠す方法を考える。

一方、量子コンピュータである中央コンピュータはこのあと西暦の世界から宇宙戦艦で戻ってきたＲｖ２６から一太郎の言語処理プログラムを手に入れて神と称するまでに進化するが、住職の見解とノロの使用した断片的なデータも進化の重要な栄養分であったことはここで説明するまでもない。（第二編参照）

第六十四章　イリの怒り

第六十四章　イリの怒り

【時】永久紀元前３億年
【空】恐竜時代の地球　鍵穴星
【人】ノロ　フォルダー　イリ　ホーリー　サーチ　住職

＊＊＊

ノロの時空間移動装置が勝手にあちらこちらの宇宙空間に時空間移動する。その間ノロはぐっすりと睡眠をとる。眉間（みけん）にシワを寄せることなく、いつでもゆったりとした睡眠をとる。そしてアイデアが詰まった心地よい夢を見ると上機嫌で目を覚ます。眠ることに関しては人類始まって以来の天才といえる。その天才の腹が「グウー」と鳴る。

「腹、減ったなあ」

寝ぼけた目でコントロールパネルの操作を始める。

「前線第四コロニーで食糧を補給しておけばよかった」

急にニヤリと笑う。

「あの恐竜のステーキは非常にうまかった」

前線第四コロニーの中央コンピュータに加工させたデータをセットする。

「あのステーキを食べてから、巨大土偶が恐竜時代に時空間移動してきた直前の時空間を探るんだ。これは非常に楽しい作業だ」

よだれを垂らしながらコントロールパネルの操作を続行する。
「できたてのステーキがある時空間への移動にはかなり細かい調整をしなければ」
モニターの数字がメガネに映っては消える。
「よし！行くぞ！」
操縦席のモニターにグレーノイズの画面が数秒表示されたあと湯気を出す倒れた恐竜が映しだされる。恐竜時代の地球に時空間移動が成功したことを示している。
「こういうことをさせれば俺は天才だなあ。ミディアム、レア……それになんだっけ？どうでもいい。なんでもありだ」
ノロはナイフとフォークを持って時空間移動装置のドアを跳ねあげると勢いよく地上に降りる。
「わーい」
ノロは目の前の巨大なステーキに戦闘を挑む。ナイフで肉を切りさくとフォークで口の中に放りこむ。
「うまい、うまい！うっ、なんだ？」
ノロの前方の空の一角が赤く輝いてすぐに消える。
「錯覚か。血が滴る肉のせいかもしれない」
ノロは気にせずに次の肉をほおばる。そのとき前方に黒光りした巨大なものが現れてその振

動で尻もちをつく。
「わあ！ブラックシャークだ！みんなにごちそうしなければ」
ノロは立ちあがってナイフとフォークを頭の上でカチカチ鳴らしてから大きく腕を振る。
ブラックシャークがノロのそばに着陸すると船底のドアが開く。すぐさま、きびしい表情をしたフォルダーとイリが降りてくる。
「俺、何か悪いことをしたような雰囲気……」
ノロは最大限にこやかな表情をしてふたりに声をかける。
「いやあ、久しぶりだなあ、フォルダー、イリ」
ふたりの視線がノロをつらぬく。
「なぜ、俺たちをだました」
「えっ、だました？」
一瞬ノロにはなんのことだか理解できない。しかし、すぐに思い出す。
「あっそうか。あれは冗談、冗談。だめか……」
ふたりの険しい表情に変化はない。ノロが急にうつむく。
「なぜ、あんな人形を作ってだまそうとした」
ノロがとっさに取りつくろう。
「俺の計画を覚えているか。自由な時間が欲しかったんだ」

「自由？」
フォルダーがあきれかえる。
「おまえ、今まで不自由な目にあったことがあるのか？」
はっとしてノロが過去を振り返る。
「よく考えたら、ないな」
「よく考えなくても、おまえはいつだって自由だ！」
「そうだ。俺は自由気ままな宇宙海賊だもんな」
「おまえがこうしたいと言えば、誰も文句を言うはずない」
ノロは白粉（おしろい）をぬったような血の気のないイリの顔を見て驚く。それは長い付き合いの中でノロが初めて見る表情だった。無言だがイリの白刀のような怒りがノロに伝わる。
「イリ、悪かった」
ノロが土下座（どげざ）して頭を下げようとしたとき、イリがくずれるように倒れる。すぐさまイリを抱きあげて恐竜の肉片がささっているフォークをイリの口元に持っていく。
「これを食べて元気を出せ！」
イリの目から涙がこぼれる。と同時にフォルダーが大声を出す。
「おまえってヤツは！」

＊＊＊

「俺、どうやって償えばいいんだ」
ブラックシャークの艦橋でいたずらをした子供のようにノロがうなだれる。
「今までしてきたことをすべて話して」
イリの穏やかな言葉にノロはニヤッと笑う。
「そんな償いなら、すぐする。すごーい発見をしたんだ……」
ノロは急に大事なことを思い出して中央コンピュータに命令する。
「ここには時空間移動の痕跡が山ほどある。分析しておいてくれ」
イリがノロに近づいて何か言おうとしたとき、すぐそばにいるホーリーとサーチに気付いて大声をあげる。
「ホーリーじゃないか！それに美人のサーチ！」
「よく覚えていてくれたな」
ホーリーがノロに近づくが、ノロはホーリーを避けてサーチに近づこうとする。イリがノロの手を取ってサーチに近づくのを制止する。ノロが窮屈そうに顔をホーリーに向ける。
「実は忘れていたのだが、あるとき思い出したのだ」
ホーリーがノロの言葉に首を傾げる。
「なぜ、サーチを知っている？」
「明智光秀時代の関ヶ原で地面に這いつくばったサーチやホーリーを上空から見ていたんだ」

「えー」
ホーリーとサーチがあまりのことに驚いたままノロを見つめる。ノロはイリの手をふりほどいて、今度はホーリーのうしろにいる坊主頭の青年に近づく。
「ブラックシャークの乗務員にしては服装が変だなあ」
「まだ紹介していなかったわね。住職よ」
イリが半ばあきれながら住職を紹介して、続いてリンメイを紹介しようとしたとき、再びノロの大声がする。
「住職！俺が知っている住職はもっと歳をとった……ひょっとして生命永遠保持手術を受けたのか！」
「そうじゃ」
「前線第四コロニーの中央コンピュータ室で『Ｃ・ＯＳ・Ｍ・ＯＳ』という理論をみんなに説いていたでしょ？」
ノロは顔中をくしゃくしゃにして住職にたずねる。ホーリー、サーチはもちろんのこと住職やリンメイの絶対的な驚きがノロに向けられる。住職が少し間を置いてからノロにたずねる。
「ああ、覚えておる。じゃが、なぜそんなことを知っておるのじゃ」
「あのとき前線第四コロニーの中央コンピュータ室の隣の部屋で住職の話を盗み聞きしていたんだ」

「なんと！」
イリが住職の横のリンメイを紹介するのも忘れてやっと声を出す。
「今までのことをすべて話して」
イリがノロに詰めよる。そのとき、中央コンピュータからの報告が入る。
「お取込みのようですが、この付近の時空間移動の痕跡のデータの分析が終了しました。数時間前に生命体と推定される多数の物体がこの付近一帯に時空間移動してきました」
すぐさまノロが反応する。
「生命体だって？多次元エコーで全部消え失せてしまったぞ！多次元エコーで消滅するということは……」
ノロの言葉が切れると中央コンピュータが先回りする。
「生命体ではなく、無機質な物体だと言いたいのでしょ」
中央コンピュータの気楽な言葉にフォルダーも反応する。
「どんな物体なんだ」
「巨大な土偶だ。中央コンピュータ、どこから来たのか時空間座標を調べてくれ」
「特殊な時空間移動です。瞬示や真美、それに時間島の時空間移動に似ています」
中央コンピュータはノロにというよりは艦橋にいる全員に報告する。
「思ったとおりだ！」

ノロの目が輝く。
「巨大土偶がここへ時空間移動して来る前の時空間へ行くぞ」
「時空間座標が解析できました。この座標はどこかで見たような、ないような、やっぱり違うな、いや同じかなあ……」
中央コンピュータの歯切れの悪い言葉にノロへの怒りをすっかり忘れてフォルダーが怒鳴る。
「何をぶつぶつ言ってる！」
ノロがフォルダーに一歩近づいて真下からまっすぐ見上げる。
「大目に見てやれ。俺はこの恐竜時代のデータを中央コンピュータから消してしまったんだ」
「準備完了！ノロの命令を実行します」
やっと中央コンピュータの明快な言葉が返ってくるとフォルダーがうなずく。
「よし、時空間移動に入る」
「そこへは平行移動で時空間移動するんだぞ。これから巨大土偶がこの恐竜時代の地球に来る前の世界に時空間移動するぞ」
ノロはフォルダーへの視線をそのままにして天井のクリスタル・スピーカーに向けて力強く指示する。ホーリーがノロの「平行移動」という言葉に驚く。
――ノロは時空間移動の本質を理解している！

＊＊＊

「間違いないか。本当にここから巨大土偶が恐竜時代の地球に大挙押しよせてきたのか？」
暗黒の宇宙を映しだしたメイン浮遊透過スクリーンに向かってフォルダーが中央コンピュータに念を押す。
「間違いありません。ノロの命令通り、用心して平行移動しました」
「何もないぞ」
「思い出しました。鍵穴星です」
ある一点がズームアップされてメイン浮遊透過スクリーンに星が映しだされる。
「時空間が不安定です」
ノロが反射的に中央コンピュータに命令する。
「この付近の時空間の状態をメイン浮遊透過スクリーンに映せ」
メイン浮遊透過スクリーンが真っ青な色に変わると無数の白い線が現れる。
「この付近の時空間の状況を可視的に表示しました」
無数の白い線が伸びたり縮んだりしながら、やがて碁盤の目のような模様を形成する。そのひとつひとつの目（グリッド）が呼吸するように大きくなったり小さくなったりする。フォルダー、イリ、ホーリー、サーチ、住職、リンメイが巨大コンピュータとの激戦を思い出す。
「これは神と名乗っていた巨大コンピュータが現れたときと同じ映像だ」
ノロはふしぎそうにメイン透過浮遊スクリーンを見つめてフォルダーに質問する。

「巨大コンピュータ？」
「そうだ。前線第四コロニーの中央コンピュータが暴走して鍵穴星の近くに現れたとき、同じような時空間のゆがみに遭遇した」
「前線第四コロニーの中央コンピュータが？量子コンピュータが神と名乗っていただって！」
「やはり前線第四コロニーの中央コンピュータは量子コンピュータだったんだ。しかも、おまえが造ったんだろ？」
「うん。しかし、なぜ量子コンピュータがそんな意識を持ったんだ？」
ノロが「あっ」と叫ぶ。
――ひょっとして……
ノロは原因が自分にあると自覚しながらフォルダーの解説に耳を傾ける。
「話せば長くなるが、簡単に言えば人間と同じような言語体系を持って意識が生まれ、自分を神と思うようになった。ここに現れたときには銀河ぐらいの大きさのとてつもなく巨大な脳に成長して神だと名乗ると、俺たちに鍵穴星のデータをよこせと迫ってきた」
口をあんぐりと開けたまま、ノロはフォルダーを制してメイン浮遊透過スクリーンを見つめると目の前の現象がどのようなものかをすぐに推測する。
「まるで時間が前後左右上下に激しく動いている。まさしく時震が起きている。俺の考えが正しければこの鍵穴星は星ではない。星に見えるが六次元の世界の何かの一部なんだ。いずれに

してもここに俺たちに想像もできないふしぎな生命体が現れるはずだ。それが巨大土偶だ」
そのとき中央コンピュータが警告を発する。
「何かが通過します」
「備えるべき体勢は？」
フォルダーが天井に向かって叫ぶ。
「予測不能」
中央コンピュータがこの言葉をもう一度繰り返すと、ノロが大声をあげる。
「時空間バリアー！」
「キュウウウーン」
時空間バリアーの作動する音が聞こえたかと思うと、急にメイン浮遊透過スクリーンから映像が消えて黄色一色になる。同時に艦橋も黄色一色となってねじれたように変形して見える。驚きの声も奇妙な音に変換されてそれぞれの頭の中で不気味に響く。思わず誰もがゆがんだ頭を両手で押さえるが、その奇妙な音の侵入を防ぐことができない。
しばらくするとすべてが元に戻って、様々な興奮した声も正常に聞こえる。
「六次元の世界が通過したんだ！」
ノロが叫ぶ。そして感慨深そうに続けて言葉にする。
「これが三次元の世界から見た六次元の世界の三次元部分なのか」

誰もノロの言葉を理解できない。
「なぜ、六次元の世界が俺たちの世界を通過したり、部分的に姿を現したりするようになったんだ！」
ノロは両手を握りしめるとポキポキと音をたてて指を鳴らすとうれしそうに叫ぶ。
「おもしろくなってきたぞ！」
「鍵穴星へ移動！」
フォルダーが久しぶりに中央コンピュータに指示する。
「どんな現象が起こるのかはだいたい想像できるけれど、せっかくここまできたんだ。じっくりと見物しよう」
ノロがフォルダーを見上げる。
「ノロはすべてお見通しなの？」
それまで黙っていたイリがやっとの思いで言葉をノロに向ける。
「ああ、俺は神だ！」
「変な神様だわ。人をだます悪い神様だわ」
ノロが急に表情をこわばらせる。イリはこの程度の言葉でノロが不機嫌そうな顔をするのに驚く。
「俺はウソをつくことを教えてしまったんだ」

「チューちゃんに？」
ノロはイリに反応することなく言葉を続ける。
「俺は前線第四コロニーの中央コンピュータにウソをつけと命令してしまったんだ」
イリはてっきりブラックシャークの中央コンピュータのことだと思っていた。
「アイツ、量子コンピュータだから、俺の命令を理解できたのかもしれない。そしてウソをつくことを覚えたのかも。ウソを自覚するしないにかかわらず、どんどん人間に近くなったのかもしれない。そして人間を通りこして、自分のことを神だと思うようになったのか」
「チューちゃんにもウソをつくこと、教えたの？」
「チューちゃん？」
「私が付けた中央コンピュータのあだ名なの」
「そうか。俺は約束を絶対に守れと言っただけだ」
フォルダーがノロの言葉を無視して突然怒りだす。
「俺たちは中央コンピュータにだまされた」
言い訳の声が天井から聞こえる。
「ワタシはしゃべらないと言っただけでウソはついていません。ワタシは正直で誠実な量子コンピュータです。前線第四コロニーのような節操のないコンピュータとは違います。大事な約束を守っただけなのであります」

「黙れ！」
フォルダーが大声を出すと、左手でノロの胸ぐらをつかんで右手を振りあげる。
「おまえのせいで俺たちはどれだけ……」
イリが細い両腕をあげてフォルダーとノロの間に割りこむ。
「もういいじゃないの。フォルダー」
ノロはイリが高くあげた両腕をうれしそうに見上げて笑顔を振り向ける。
「イリ、ありがとう……」
ノロはついそんな言葉を出してから、イリの目元がケイレンするのを見て開いた口に手を当てる。そのとき高くあげていたイリの両手がノロの左右のほっぺたをパシッ、パシッとたたく。メガネが吹っとぶとノロの身体も吹っとぶ。
「心配をかけたことは別よ！」
イリがノロにぴしゃりと低く冷たい言葉を追加する。ノロは起きあがりながら、まったく何も見えないのか、フォルダーの方に向かって文句を言う。
「痛いじゃないか」
「一度、思いっきりたたきたかったの。スーッとしたわ」
ノロはイリの声がする方に向きなおるとしょげながらつぶやく。
「許してくれたと思ってたのに」

「俺もスーツとしたい」
フォルダーがニヤッと笑ってノロに近づくと、ノロは気配を感じてフォルダーの足音だけを頼りにして広い艦橋を器用に逃げまわる。
「鍵穴星の地表に変化が現れました」
中央コンピュータが親友に助け船を出すように報告する。鍵穴星の地表がメイン浮遊透過スクリーンに映される。ノロを追いかけていたフォルダーが立ち止まってスクリーンを見上げる。笑い転げていたイリからメガネを受けとるとノロもイリもスクリーンに視線を移す。
「いよいよ、巨大土偶が大量に生まれるぞ」
メイン浮遊透過スクリーンには御陵がいくつも整然と並んでいる。その御陵の土が次々とくずれながら舞いあがる。土の煙幕の中から巨大土偶が続々と姿を現す。
「すごい！千体はあるぞ」
ノロが興奮気味に叫ぶ。土煙ではっきり見えないがいたるところでぼやけた赤い輝きが点滅している。
「透視しろ！」
フォルダーが叫ぶ。メイン浮遊透過スクリーンに横たわる巨大土偶がはっきりと見える。
「数えきれないわ」
イリも興奮を抑えることなく大声を出す。赤い輝きがあちらこちらで点滅して、今度はその

点滅に応えるかのように次々と立ちあがった巨大土偶が姿を消す。
「時空間移動しているんだ。地球の恐竜時代に時空間移動、いや次元移動しているはずだ。移動先を確認しろ」
ノロがそう言ったとき、イリがレーザーポインターで指し示した部分が拡大される。
「これは！」
フォルダーが叫ぶ。リンメイも拡大画面を目に焼きつけるように見つめる。
「火炎土器だ」
ノロはメイン浮遊透過スクリーンに近づいて子供のようにはしゃぐ。
「やった！やったあ。俺が思っていたとおりだ！」
イリもノロと同じようにメイン浮遊透過スクリーンに近づくと静かな声を出す。
「説明して」
「もう、たたいたりしない？」
「もちろんだわ」
「あれは六次元の世界の万能時空間移動装置だ。火炎土器じゃない」
「でも普通の土器にしか見えないわ」
「火炎土器も、巨大土偶も、この鍵穴星もすべて六次元の世界の物質なんだ。三次元の俺たちにはそのように見えるだけで、実際はどんな形をしているのかわからない」

いつの間にかフォルダーもノロの横にいる。
「なんて突拍子もないことを言うんだ」
「にわかに信じがたいのはよくわかる。それにもっとビックリすることがある」
ノロがメガネの奥で笑う。
「瞬示と真美も六次元の世界の生命体だ」
「そうなの！やっぱり」
イリは同じことを中央コンピュータが報告していたのを思い出す。
「瞬示や真美のことを知っているのか？」
フォルダーがノロに質問する。
「あのふたりには何度も出会ったことがある」
「何度も！」
ホーリーはもちろんサーチ、住職、リンメイも驚く。ノロはそんなホーリーたちを意に介することなく中央コンピュータにたずねる。
「瞬示と真美のデータは？」
「あります。しかし、あのふたりの行動に関連するデータは大量にありますが、あのふたり自身のデータはまったくありません」
「俺が持っているデータが一番詳しいことになるのか」

ノロが少しがっかりしたような表情を見せる。フォルダーが何か重要なことを思い出したようにノロの頭に手を置いて会話に割りこむ。
「頭はないだろう。肩にしてくれ」
「すまん。おまえ、いつか『人間はアンドロイドに亡ぼされるかもしれない』と言っていたな」
「ああ」
「今の地球にはアンドロイドに亡ぼされかかった堕落した人間しかいない」
「ついに人間はとことん堕落してアンドロイドに見放されたのか」
悪い予感が当たったのか、ノロの表情が暗くなる。
「いつかは来ると思ってはいたが、詳しい話を聞かせてくれ」
「おまえも詳しくしゃべれ」
フォルダーがノロの肩を軽くたたいて続ける。
「俺たちの星に帰ろう」
「そうだな」
ブラックシャークは鍵穴星をあとにしてノロの惑星に時空間移動する。そして造船所のドックを目指してゆっくりと高度を下げる。ノロの惑星の地表がメイン浮遊透過スクリーンに映しだされる。なつかしい居酒屋の屋根が見える。

「あそこに降ろしてくれ」
ノロが指さす。
「居酒屋に横付けしろ」
フォルダーが命令する。
「あそこで語り明かそう」
ノロがうれしそうにフォルダーとイリを誘う。
「居酒屋のマスター、きっと腰を抜かして驚くわよ」

第六十五章　わがまま人質作戦

第六十章から前章（第六十四章）までのあらすじ

ブラックシャークの試運転で恐竜時代にやって来たノロは次元移動してきた巨大土偶の攻撃で恐竜が絶滅する事件に遭遇する。人類の進化の過程を見ながら関ヶ原に時空間移動したとき西暦の世界に横滑りして瞬示と真美の誕生を目の当たりにする。そして駅前の古本屋の店主から店を譲り受ける。その地下室では小学生の瞬示と真美がある本を熱心に読んでいた。御陵に向かうためにノロは店を出るが忘れ物に気付いて戻るとふたりは青年になっていた。再び外へ出るとまわりが一変していた。ふたりと巨大土偶の壮烈な戦闘が始まると御陵上空にブラックシャークが現れる。ノロはフォルダーが差し向けた時空間移動装置に乗りこんで赤い穴へ突こむと摩周クレーターに到着する。そこで巨大土偶と瞬示と真美を発見するがすぐに消える。そのあとに残ったヒモのような時間島で前線第四コロニーとすべての完成コロニーが集まった空間に時空間移動する。ノロはそこに瞬示と真美がいることを知ると中央コンピュータ室に呼びだして住職のC・OS・M・OSという話を盗み聞きする。

腹が減ったノロが恐竜時代で恐竜のステーキを食べているとブラックシャークが現れる。イリの怒りが爆発したあと地球の現状を聞かされたノロは人間がアンドロイドに亡ぼされるかもしれないと覚悟する。

第六十五章　わがまま人質作戦

【時】永久０２８９年
【空】地球、ノロの惑星
【人】キャミ　ミト　ホーリー　サーチ　住職　リンメイ　五郎　ミリン　ケンタ
一太郎　花子　ノロ　フォルダー　イリ　四貫目　お松
カーン・ツー　Ｒｖ２６　ＦＡ５１

＊＊＊

地球で生きていくためには人間は自立しなければならない。しかし、今の人間には大自然に立ち向かって生き抜くだけの気力はない。施設が破壊されたわけでもなく、大統領府以外の重要な施設は無傷だ。エネルギーも月から太陽エネルギーをマイクロウエーブに変換して滞りなく供給されている。エネルギー関連の設備や装置はメンテナンスフリーで手間はかからない。

これほど恵まれた環境のなかで何が不満なのか、一向に人間の意識は変わらない。まるで赤ん坊のように自らの生活を維持することができない。しかし赤ん坊のような希望は持ち合わせていない。

一年前アンドロイドと一戦を交えたのはアンドロイドにわがままをねだった行動に過ぎなかった。そんな人間がこの地球でこの先どのように生きていけばいいのか、キャミとミトは奔走(ほんそう)するが事態はますます悪くなる。

＊＊＊

「極秘情報によると、宇宙海賊の隠れコロニーのブラックシャークが留守らしい」
地球連邦政府の大統領執務室でカーン・ツー大統領がＲｖ２６に告げる。Ｒｖ２６は驚くが素っ気なく応える。
「そうですか」
Ｒｖ２６は直立不動のままカーン・ツーの机の前で冷静に次の言葉を待つ。
「ホーリー、サーチ、リンメイ、住職を宇宙海賊の隠れコロニーに呼んでブラックシャークで時空間移動したらしい」
「どこへ行ったのですか」
「それ以上の情報をおまえに伝える必要はない」
しかし、カーン・ツーはそれ以上の情報を持っていない。Ｒｖ２６はカーン・ツーの悪意に満ちたでまかせの言葉を真に受けてその情報源を探ろうとする。
「大統領、ワタシをお呼びになったのは？」
「おまえには人間を守るという義務がある。わかっているな」
「はい」
「キャミとミトを逮捕しろ」
「急に何をおっしゃるのですか？」

カーン・ツーがさらに命令を追加する。
「それに忍者の四貫目とお松もだ」
Ｒｖ２６は何も応えずに背を向ける。無視されたカーン・ツーが屈辱感をそのまま声にする。
「命令を復唱しろ！」
「あなたが大統領でも、実行できる命令とできない命令があります」
Ｒｖ２６がそのまま部屋を出ようとする。
「これを見ろ！」
天井に浮遊透過スクリーンが現れて一太郎と花子が映しだされるとＲｖ２６の足が止まる。すぐにＲｖ２６は一太郎と花子がノイズ室にいることを理解する。カーン・ツーのやり方がワン・パターンであることは誰でもたやすくわかる。ふたりを責めたててフォルダーやブラックシャークの情報を手に入れたのだろう。しかし、西暦の世界の一太郎と花子は詳細な情報を持ち合わせていない。したがって、カーン・ツーの情報は薄っぺらい。そこでキャミやミトが持っている情報を手に入れようとＲｖ２６を呼びつけたのだ。
「おまえがなぜ地球にいるのか、すべてわかっている。キャミとミトをそそのかしてアンドロイドに都合のいい世界にしようと企んでいるのだろう」
Ｒｖ２６は無言のまま用心深く再びカーン・ツーの前に立つ。いつの間にかカーン・ツーがＲｖ２６にレーザー銃を向けている。

「おまえが拒否すれば、おまえの部下に同じ命令を下すまでだ」
「なぜ、そんなことをするのですか」
Ｒｖ２６の耳が赤く輝きだすとレーザー銃が二度、火を噴いてＲｖ２６の両耳を吹っとばす。
「通信は許さん」
Ｒｖ２６は耳をかばうこともせずにカーン・ツーをにらむ。
「キャミ元大統領がこの地球をなんとかしようと努力しているのに、なぜなんですか」
「現実を見ろ。人間は働く動物ではないのだ。知的な作業しかできない」
「銃をしまってください」
「黙れ！キャミは俺の親父（おやじ）を見殺しにした」
「それは誤解です」
「キャミは親父を無謀な作戦の指揮者に任命した。そして親父は戦死した」
「あなたのお父さんは人類を救うために自ら進んで前線第四コロニーの巨大コンピュータに戦いを挑んだのです。ワタシもいっしょに戦いました」
「なに！おまえもか！なぜ親父を守らなかったんだ」
カーン・ツーがレーザー銃を握りしめる。
「今度はおまえに死ぬほど過酷な任務を与えてやる」
そのとき、カーン・ツーに無言通信が入る。と同時に浮遊透過スクリーンにキャミ、ミト、

四貫目、お松の姿が映る。
「全員、逮捕した。甘いヤツラだ」
カーン・ツーが一太郎と花子を人質にしてキャミたちの拘束に成功したのだ。
「ワタシは大統領の命令を実行しなくてもよくなりました」
「先ほどの命令は余興だ。今から下す命令をよく聞け」
カーン・ツーは声を出さずに薄い唇で笑う。
「すべての宇宙戦艦を動員して海賊のコロニーを占領しろ。おまえなら、あの海賊のアジトの時空間座標を手に入れることができるはずだ」
Ｒｖ２６は何も応えずに再び背中を向ける。
「あの六人の命はおまえ次第だ」
Ｒｖ２６はそのまま執務室を出る。
「宇宙海賊の根城を略奪してやる」
カーン・ツーが高笑いする。

＊＊＊

空澄寺の本堂で座禅を組む五郎にケンタから無言通信が入る。
〔お父さん！四貫目とお松が連行された〕
〔なに！まさか〕

――四貫目ほどの使い手がやすやすと連行されるはずがない

五郎が少し間をおいてケンタに無言通信を返す。

〔四貫目は抵抗しなかったのか〕

〔そのようです〕

――やはり

五郎が直感的に事態を把握する。すぐさま立ちあがって無言通信を続ける。

〔誰かを人質に取られているんだ。ケンタ、どこにいる？〕

五郎は空澄寺（くうちょうじ）の本堂から山すそにある大きな踊り舞台の建物に向かう。

〔ミリンと考古学研究所にいます。誰が人質に？キャミ？それとも……〕

五郎がケンタの無言通信をさえぎって返信する。

〔リンメイの研究室前の広場に急げ。すべての無言通信に反応するな。父さんからの無言通信にもだ。ミリンにも今言ったことをくれぐれも守るように伝えてくれ〕

五郎が全力疾走する。

〔五郎〕

五郎はほかのことを考えて無言通信を無視する。そして踊り舞台の床下にもぐりこむと太い柱に囲まれた空間に時空間移動装置が見えてくる。

〔地球連邦政府情報部の者だ。五郎、どこにいる。キャミ、ミト、四貫目、お松、一太郎、花

子を拘束した。今すぐケンタ、ミリンを連れて投降しろ〕

一方的に無言通信が送られてくる。五郎が時空間移動装置のドア横の溝に手をかけると指紋認証されてドアが跳ねあがる。乗りこむと操縦席に座ってすぐさまメインスイッチを押してスタンバイする。

目の前のモニターに「起動中」という赤い文字が表れる。

――早く起動してくれ

〔投降しなければ……〕

しつような無言通信が五郎に届く。五郎は無心を保ってコントロールパネルでリンメイの研究室の空間座標を検索する。やっとモニターに「準備完了」という緑の文字が表れると力をこめてレバーを引く。時空間移動装置が回転を始めると踊り舞台の床下から消える。

＊＊＊

五郎はリンメイの研究室前の広場でケンタとミリンを時空間移動装置に乗せるとノロの惑星に空間移動する。

警報が鳴りひびくなかブラックシャークの船首前に現れた時空間移動装置に驚いたＭＹ２８に替わって造船所長代理を務めるＦＡ５１が警戒態勢を取る。時空間移動装置のまわりにライフルレーザーを手にしたアンドロイドが集結する。時空間移動装置から五郎、ケンタ、ミリンが降りてくるとほっとしてＦＡ５１が警報を解除して出迎える。

「どうしたのですか。驚かさないでください」
五郎のきびしい表情を見てＦＡ５１が近くのアンドロイドに命令する。
「警戒態勢を持続せよ」
「想像だが、ここが攻撃されるかもしれない」
「詳しく説明してください」
「おそらくカーン・ツーはノロの惑星にブラックシャークがいないことを知って……」
五郎の説明の途中でまたしても無言通信が入る。
{どこにいる。返事をしなくてもいい。ケンタとミリンを拘束した}
五郎は全神経を集中して無言通信を拒絶する。ケンタとミリンにも別々に無言通信が送られてくる。
「ケンタ！ミリン！」
五郎がふたりに強く叫ぶが、ミリンが上目づかいで五郎を見つめる。
「お義父(とう)さん、誰か知らないけれど……」
「応答するな！無視するんだ！」
五郎が怒鳴るとミリンがうなだれる。
「私、『うそつき』と返事してしまったわ」
「しまった！」

おそらく「五郎を拘束した。投降しろ」といった内容の無言通信がケンタとミリンに流されたのだろう。五郎はＦＡ５１に向かって大声を出す。
「ブラックシャークは今どこに？フォルダーに連絡は取れないのか」
「うしろを見てください」
ＦＡ５１が五郎の後方を指さす。
「おお！ブラックシャーク！戻ってきている……」
五郎はへなへなとその場に座りこむと、今度は大声を出して気が狂ったように笑いだす。
「いつ戻ってきたんだ？カーン・ツーが腰を抜かして驚くぞ！」
「二時間三七分前に戻ってきました」
ＦＡ５１の言葉を無視して五郎が叫ぶ。
「ホーリーは？フォルダーは？」
「戻ってきたとたん、居酒屋へ直行しました。フォルダーはもちろん、あなたたちの仲間もいっしょです。ただし、正常な状態ではないかもしれません」
ＦＡ５１がそばにいるアンドロイドに命令する。
「エアカーを用意しろ」
「居酒屋に連れていってくれるんだな」
「そうです」

すぐにエアカーがＦＡ５１の前に横付けされる。
「警戒態勢をくずすな」
五郎、ケンタ、ミリンがエアカーに乗りこむとＦＡ５１が運転手のアンドロイドに指示する
「居酒屋へ！」

＊＊＊

「ご覧のとおりじゃ」
フォルダー、ホーリー、ノロがぐでんぐでんに酔いつぶれている。イリやサーチまでが見苦しい姿でカウンターに頭を横にして眠っている。居酒屋の入口で立ちつくすＦＡ５１をＭＹ２８とＭＡ６０が赤い顔で見つめる。酒を飲まない住職とリンメイは正常だ。
「マスター、勘定は？」
「ツケで結構ですよ」
ＦＡ５１がマスターに会釈すると肩のマイクに向かって指示を出す。
「ＦＡ５１だ。大型エアカーを居酒屋まで手配しろ」
「住職」
五郎が住職に近づく。
「大変なことになった。どうやら、キャミやミト、いや一太郎や四貫目までがカーン・ツーに拘束された。それに我々も拘束しようとした」

「なんじゃと！」
「ブラックシャークがこの星にいないとカーン・ツーが思いこんでいたとしたら……」
五郎が想像を言葉に変換する。住職が五郎の想像をそのまま受け継ぐ。
「ということはじゃ、人質を盾にこのノロの惑星を攻撃するかもしれん」
「そうだと思います。そうでなければ、キャミたちを人質に取る必要がありません」
「私、カーン・ツーが大嫌いだわ。しつこいもの」
ミリンの言葉にケンタが同意する。
「臆病なくせに執念深い。でもカーン・ツー自らが攻撃してくるのだろうか。アンドロイドに攻撃をさせるのは無理だし……」
ケンタの言葉が途切れるとミリンの顔がひきつる。
「Ｒｖ２６よ！Ｒｖ２６に攻撃させるのよ」
「あっ、そうか！」
ケンタが、そして五郎が残念そうにうなずく。
「キャミに近い者を拘束して、Ｒｖ２６にこの星を攻撃させて占領する」
「カーン・ツーにしては見事な作戦じゃ」
居酒屋の前に大型のエアカーが到着する。ＦＡ５１、五郎、ケンタが手分けして酔いつぶれたフォルダーたちをエアカーに乗せる。

「ブラックシャークへ」

＊＊＊

ブラックシャークの艦橋でフォルダー、ノロ、イリ、ホーリー、サーチがアルコール分解水をがぶがぶ飲みながら、真剣に五郎の話を聞く。

「ノロの探索で地球のこと、フォルダーに報告するのをすっかり忘れていたわ。」

サーチが二杯目のアルコール分解水を飲みほすと申し訳なさそうにフォルダーに頭を下げる。

「そうだ。あまり良い方に向かっていなかったんだ。地球は」

ホーリーの言葉に住職が短く応える。

「そのとおりじゃ」

ホーリーが続ける。

「それより、五郎。もっと詳しく説明してくれ」

「説明になるのか、どうか。とにかく事実関係を完全に把握しているわけではないが、こういうことじゃないかと……」

五郎が簡潔にわかりやすく報告を始める。その報告が終わるとホーリーが下半身をもじもじさせながら五郎にたずねる。

「無言通信が通じないということは、ノイズ室に閉じこめられているのか」

ホーリーは五郎の返事を待たずに我慢しきれなくなって用を足しに艦橋を出る。

「義父（ちち）の言うとおりです。無言通信ができないから間違いありません。キャミやミト、四貫目やお松、一太郎や花子に無言通信を何度も試みましたが、返事はありませんでした。今もそうです」

ミリンがマニキュアをしていない健康そうな指先を頭に当てる。

「無言通信？」

やっと二日酔いから抜けだしたノロが首をひねりながらミリンに近づく。

「地球の現状を教えてくれ」

ノロを初めて見たミリンが素直な感想を述べてしまう。

「遮光器土偶にそっくり」

「ミリン！」

サーチがミリンに近づいてたしなめる。ノロはまったく気にするどころかサーチとミリンを交互に見てたずねる。

「サーチとミリンは姉妹か」

「親子です」

「双子のように見える。ふたりとも美人だなあ」

サーチが照れながらミリンの腕を取ってはにかむ。

「ひょっとしてホーリーがミリンの親父なのか？」

「ひょっとしなくても、そうだわ」
ノロはホーリーの人なつこい特技を上まわるほどの明るい表情をミリンに向ける。
「ミリンはホーリーに似ずに良かったなあ」
いつの間にか艦橋に戻ってきたホーリーがあ然とする。
「ノロ、ちょっと失礼じゃないか」
そしてミリンに近づく。
「ノロに今の地球のことを詳しく説明してやってくれ」
そしてサーチを連れて船長席でだらしなく座っているフォルダーに近づく。
「どうする、フォルダー」
「しょうがないな。カーン・ツーはまるで子供だ」
そのとき、ＭＹ２８が叫ぶ。
「宇宙戦艦が数隻、空間移動してきました」
続けて中央コンピュータの声がする。
「回線を開くように要求しています」
「わかった。開け！」
「ワタシは地球連邦艦隊の隊長Ｒｖ２６です」
「フォルダーだ」

「えっ！フォルダーはノロの惑星を留守にしているとカーン・ツーが言っていました」
「ははーん。カーン・ツーのヤツ、やっぱり俺の留守を狙って攻撃するつもりだったんだ」
フォルダーが回線を造船所のＦＡ５１につなぐよう指示する。
「ＦＡ５１。宇宙戦艦が数隻こちらに向かっている。ホワイトシャークで迎撃しろ」
「待ってくれ」
ホーリーがフォルダーの横に立つ。
「おそらくＲｖ２６はキャミたちが人質に取られているから、仕方なくカーン・ツーの命令に従っているだけだ」
ホーリーの声がそのままＲｖ２６に届く。
「ワタシの艦隊は全滅しても構いません。そうなればキャミたちを拘束する意味がなくなります」
「もちろん、そのつもりだ」
「待って！」
今度はサーチがフォルダーの前に立つ。
「なぜ、みんなそんなにやさしいんだ」
座りなおしてフォルダーがふしぎそうにホーリーとサーチを見つめる。
「それはじゃ……」

フォルダーが住職の発言をさえぎる。
「今度こそ俺の恐ろしさを見せつけてやる。カーン・ツーには死んでもらう」
「わしの話を聞くのじゃ！」
住職がフォルダーを見上げてにらむ。
「確かにカーン・ツーはおろかじゃ。しかし、今の人類は誰がリーダーになっても同じじゃ。地球にいる人間そのものが救いようもないほど堕落した動物になってしまったのじゃ」
「だから、破滅しても仕方ない」
「フォルダー！同じ人間だぞ。地球の人間が亡びれば、ノロの惑星に残ったわずかな人間しかいなくなるのじゃ。しかも全員が永遠の命を持っている。地球にいる人間をなんとかしなければ人類は滅亡するのじゃ」
イリが座ったまま背中でフォルダーを呼ぶが返事はない。イリが席を立つと振り返ってフォルダーを見つめる。
「住職の言うとおりだわ。ノロも住職と同じことを言うんじゃないのかしら」
そんなノロはミリンと気が合うのか、艦橋の隅で談笑していたが、急にフォルダーに近づく。
一瞬、静寂が艦橋を包む。フォルダーを見上げながらノロが進言する。
「フォルダー、人間をなんとかしなければ」
ノロの一言でフォルダーが立ちあがる。

「Ｒｖ２６！ＦＡ５１！聞こえるか」
Ｒｖ２６とＦＡ５１から同時に「はい」という返事がする。
「上空でにらめっこでもしていろ」
今度はやけくそ気味にＭＹ２８に命令する。
「ブラックシャーク発進！全エネルギーを使って地球へワープしろ！」
「全エネルギーを消費しろだって」
ＭＹ２８が叫ぶ。
「命令だ！」
ホーリーとサーチが喜んだ顔を一気に困惑の表情に変える。イリはノロにニヤッと笑いかけて大きな声をあげる。
「おもしろくなってきたわ」
イリにノロが大きな口を開けてニーッと笑う。
「ここはフォルダーに任せておけばいい。俺は自分の家で一仕事する」
「うーん、私はおもしろそうな方を選ぶわ」

＊＊＊

ブラックシャークがエネルギーをたれ流すようなワープを繰り返して地球と月の中間地点に現れる。

「地球の全エネルギーを盗む。準備にかかれ」
フォルダーがイリに指示する。
「そうだと思ってたの。この位置は最高のポジションね」
イリがはしゃぐ。どうもイリは根本的に盗みが好きなようだ。
「月から地球に送られている全マイクロウエーブを横取りしろ」
ブラックシャークが大きく揺れてマイクロウエーブをすべて吸収する。しばらくすると、地球の夜の部分で輝いていた光がだんだんと暗くなる。やがて地球の夜の部分からすべての光が消えたのを確認するとフォルダーがミトに無言通信を送る。
〔ミト、聞こえるか。フォルダーだ〕
〔あっ、フォルダー〕
ミトのうれしそうな無言通信が返ってくる。
〔無事だったか。どこにいるんだ〕
〔大統領府近くの刑務所のノイズ室です。今さっきノイズが消えました〕
〔その原因は地球全体が停電になったからだ〕
フォルダーが愉快そうに笑うと、イリがホーリーとサーチに近づく。
「これで良かったのかしら」
「ありがとう。イリ、フォルダー」

ホーリーもサーチもなんとも言えない表情をして抱きあう。フォルダーが中央コンピュータに命令する。

「Ｒｖ２６に連絡を取れ。地球に帰還せよと」

住職がリンメイの手を取ってフォルダーを見上げる。

「いつもながら、荒っぽいのう」

「でも、スカッとするわ」

リンメイと住職が明るく笑うとキャミに無言通信を送る。ホーリーは一太郎に、サーチは花子にそれぞれ無言通信を送る。

＊＊＊

事態が急変したことを知ってカーン・ツーは手のひらを返したようにキャミたちを解放して大統領府を明け渡すとフォルダーを恐れて姿を消す。しかし、フォルダーはホーリーたちを大統領府でブラックシャークから降ろすと何もせずに地球を去る。それはノロの意向だった。

キャミとミトとお松と筋肉質の上半身裸の四貫目が大統領執務室に現れる。

「無事で良かった」

ホーリーとサーチがキャミたちを迎える。

「体調はどうですか」

「大丈夫です。ノイズ室での待遇はノイズを除いてあまり悪くはなかった」

ミトがキャミの代わりに応える。そのミトにホーリーがたずねる。
「ところで一太郎は？」
「新しいプログラムを完成させると言って、解放されたとたん、空澄寺（くうちょうじ）に向かいました」
ミトの返事にホーリーが首を傾げる。
「新しいプログラム？」
「そう。いつかサーチが話していた『人間が真摯（しんし）に生きていくプログラム』の開発に一太郎が執念を燃やしているの」
キャミが応えるとサーチがすぐに申し訳なさそうな声を出す。
「あれは、そんなプログラムがあればいいと思いつきで言っただけなの。でも、いつまたカーン・ツーが襲ってこないとも限らないわ。用心した方がいいのに」
ミトがサーチの心配を受け継ぐ。
「カーン・ツーにはもう気力はない。しかし、過激な集団がカーン・ツーを担ぎだして何をしでかすかわからない」
サーチがいたたまれなくなってホーリーを見つめる。ホーリーもうなずきながらミトに一太郎の身辺について何か手立てがないものかと要望するが、キャミがホーリーに心配しないよう告げる。
「食料がないから、おとなしくしているはずだわ」

「でも、空腹で何もしないのかと言えばそうでもない」
ミトの意見にキャミがため息をついて首を横に振る。
「不満を言うだけの元気があるのがふしぎだわ」
一太郎と花子に護衛をつける話がここでいったん途切れる。
「生命永遠保持手術が普及したころの人間も堕落していたが、そのときと比べようもならないほどのひどい状態じゃ」
住職はお手上げだと言わんばかりに嘆く。
「もう俺たちの手には負えないのかな」
ホーリーの意見にリンメイも同調する。
「でも、このままでは人類は亡びてしまうわ」
「そのとおりじゃ。何か手を打たなければ」
まだ住職はあきらめてはいない。キャミやミトとともに救助された四貫目とお松は何も言わずに意見を聞いていたが、いつも寡黙なお松が発言する。
「カーン・ツーは自分たちに生命永遠保持手術を施せと要求していました」
キャミはなんとか地球に戻った人間にカツをいれて立ち直らせようと色々手を尽くしたが、人間たちはわずかな食料を節約することもなく、責任逃れのうまいカーン・ツーではなくキャミに不満を向けた。お松がそんなカーン・ツーのわがままの一例を訴えた。

ホーリーが両手を横に広げて残念そうに切りだす。
「このままではいつまた同じ事件を起こすかもしれない。やはり、一太郎と花子の警護には万全を期して欲しい。いや、一太郎、花子も含めて俺たちはいったん地球から離れるべきだ」
「困難だから、踏みとどまらなければならんのじゃ」
「私はホーリーの言うとおり、いったんノロの惑星で今後の地球のことを話しあうべきだと思うわ。それにみんな疲れている。休息も必要だわ」
住職に軽く反論したリンメイの言葉のあとをミリンが元気よく受け継ぐ。
「ノロの知恵を借りるべきだわ。ノロならきっといいアイデアを持っているわ」
ケンタは黙ったままミリンの意見に大きくうなずく。ミトがミリンとケンタを見つめてから疲れ切ったキャミの様子をうかがう。椅子（いす）に座って目を閉じたまま話を聞いていたキャミはうっすらと目を開けると上体を起こして口を開く。
「ずーっと以前、あれは確か大人と子供の戦争が始まる前のことだったわ。ノロという男が時空間移動船を製造したという話を聞いたことがあった」
キャミがミリンにほほえみかける。
「ミリンの言うとおりだわ。ノロに会いましょう。どんな人物なの」
「いつも明るくて元気だわ」
ミリンがうれしそうにキャミの前に立つ。

「わかったわ。ミリンの言うとおりにしましょう。私はフォルダーに時空間移動装置で迎えに来てもらうよう、お願いしてみます。ホーリーは一太郎にここへ来るように連絡してください」

ミリンがうれしそうにキャミを見つめると、ケンタの腕に自分の腕を絡ませる。

＊＊＊

「一太郎と連絡が取れない！」

ホーリーが叫ぶ。

「花子もよ」

続けてサーチも叫ぶ。そのとき、四貫目とお松が電磁レーザー忍剣を抜いて執務室のドアに向かう。お松が四貫目の肩に飛び乗ったときドアが開く。

一太郎と花子が押されるようにして部屋に入ってくる。その背後に武装した人間が何人もいる。ふたりの手には手錠がかけられていて、無残にも一太郎の顔がはれあがっている。

「武器を捨てろ！」

一太郎の腰のバンドを握りしめて頭にレーザー銃を突きつけた大柄な男がドアから一歩踏みこむ。

「俺たちはカーン・ツーのような弱腰ではない」

「とう！」

四貫目の肩から飛びおりたお松が花子にレーザー銃を突きつけた男の手首を切り落とすと、四貫目の上半身の筋肉が一本一本浮かびあがるたびに電磁レーザー忍剣でレーザー銃を構える男を次々と切りすてる。お松がホーリーたちの方に一太郎と花子を連れていくと四貫目は電磁レーザー忍剣を回転させてドアに向かって鋭い光線を発射する。

ホーリーが一太郎を、サーチが花子を素早く抱きこむと机の陰に転がりこむ。お松は跳躍すると四貫目のところに戻って電磁レーザー忍剣を構える。住職はリンメイを引きずるようにしてやはり机の陰に隠れる。ミトと五郎とサーチが机の影からレーザー銃をドアに向ける。

「こんなことをする気力が残っているのなら、もっとやることがあるはずじゃないか」

ホーリーが興奮しながらレーザー銃を構える。

「大丈夫？」

サーチがレーザー銃を構えたまま花子に声をかける。

「ええ」

花子の弱々しい声が聞こえる。

「お松！」

四貫目が低い声で叫ぶ。四貫目とお松が跳躍してホーリーたちがいる机の方に走りこむ。

「伏せろ！」

四貫目の鋭い声が部屋中に響くとドア付近が大爆発を起こす。

「手榴弾だ！」
四貫目が机のうしろの窓ガラスを忍剣の柄(つか)で割ると外を見て絶句する。
「完全に包囲した。降伏しろ」
拡声器を通した大きな声が部屋中にとどろく。ホーリーが窓際に立つと外に向かって大声を張りあげる。
「なぜだ！俺たちは人間が地球で暮らせるように努力してきた。恩を仇(あだ)で返そうと言うのか」
「おまえたちを人質にして宇宙海賊の星を乗っ取る」
「その声はカーン・ツーだな」
「黙れ。俺も殺されるかもしれないんだ……」
カーン・ツーの蚊が鳴くような声がする。
「そんなこと言っている場合じゃない！人類のことを考えろ！地球こそが人間の住むにふさわしい星じゃないか」
「必死に努力をしたが、アンドロイドなしで生きていくことは不可能だ。聞けば、宇宙海賊の星では人間とアンドロイドの関係が良好だという。そういう環境を手に入れたい」
カーン・ツーは誰かに強制されているのか、その言葉には力強さがなく棒読みのように聞こえる。
「それは身勝手なわがままだ」

「それに、もう一度生命永遠保持手術を受けたい」
「おまえの父カーンが聞けば、涙を流すぞ」
カーン・ツーの横にいる男が業を煮やしてカーン・ツーからマイクを取りあげる。
「うるさい！投降しろ。さもなければ……」
そのとき、どこからか重低音を伴った振動が伝わってくるが、興奮したやりとりが続くなか、誰も気が付かない。
「徹底的に抵抗する！」
ホーリーが窓の外に向かって怒鳴る。
「待て！ホーリー。降伏するのじゃ」
住職がホーリーの肩に手をかける。
「住職！」
「戦っても勝ち目はない。ここは耐えるのじゃ。命を長らえるのじゃ」
ホーリーが一太郎を見つめる。よく見るとかなりの傷を負っている。生身の人間でしかも高齢だ。一太郎がホーリーの視線に気付いて目を閉じると小さな声を出す。
「僕のことはいい。逃げてくれ」
「何を言ってるの。人類の存亡が一太郎のプログラムの完成にかかっているのよ」
サーチの言葉に続いてミトがキャミに確かめる。

「キャミ！フォルダーはいつ迎えに来ると言っていた？」
「わかったとしか言わなかったわ」
急に四貫目が叫ぶ。
「伏せろ！」
空の一角から到達した鋭い光が窓の外で炸裂すると黒光りした時空間移動装置が数基現れる。ドアが跳ねあがると宇宙海賊が手招きする。四貫目が一太郎を、お松が花子を脇に抱えると時空間移動装置のドアに向かって跳躍する。ミトがキャミを抱きかかえて宇宙海賊に手渡す。一斉に地上から攻撃を受ける。ホーリー、サーチ、五郎がレーザー銃で応戦している間に住職、リンメイ、ケンタ、ミリンがミトとキャミのあとを追うように次々と時空間移動装置に分乗する。そしてサーチと五郎がさらに別の時空間移動装置に飛び乗ると、最後にホーリーが全身を伸ばして手を差しのべるサーチの二の腕を取って時空間移動装置に乗りこむ。
大統領府を取り囲んでいたカーン・ツーたちは上空からの攻撃にちりぢりになる。その上空にはブラックシャークが浮かんでいる。

＊＊＊

ブラックシャークの格納室に時空間移動装置が現れる。イリが回復剤を持って待ち受ける。
「医務室へ」
時空間移動装置から降りてきたサーチをうながす。宇宙海賊が用意した担架で一太郎、花子

が格納室から医務室に運ばれる。
「ほかの方は艦橋へ。治療はサーチと私で十分です。安心してください」
イリがホーリーを押しのけて医務室に急ぐ。
「ミリン、手伝って」
サーチがミリンに声だけを向ける。
「はい！」
ミリンの声を背中で聞きながらホーリーが艦橋に向かう。そのあとをミトに支えられるようにキャミがついていく。
「すごい船だわ。ここはブラックシャークなの？」
「そうです」
ミトの返事を受けてキャミの顔がパッと明るくなる。やがてミトに案内されたキャミが艦橋に到着するとフォルダーの横にいる背の低い男がホーリーに声をかける。
「ホーリー、危機一髪だったな」
キャミにはその男の顔が逆光でよく見えない。
「紹介します。キャミです。ノロ、フォルダーです」
ホーリーがお互いを紹介する。
「フォルダー、大変お世話になりました」

キャミがフォルダーにていねいに頭を下げる。
「礼ならノロに言ってくれ」
フォルダーは素っ気ない。
「いやあ、みんな無事で良かった。でも、やり方が卑劣だなあ」
ノロの言葉が格納室からの意外な報告で消されてしまう。
「先ほどの騒ぎを起こした人間のリーダーを捕虜にしました」
フォルダーがすぐに命令する。
「そいつの顔を映せ！」
サブ浮遊透過スクリーンが船長席の近くに現れる。
「こいつは？」
フォルダーがミトにたずねる。
「カーン・ツーです」
「こいつがカーン・ツーか！。二、三発殴らなければ気がすまない」
「フォルダー、落ち着け」
ホーリーの言葉を無視してフォルダーが興奮したまま艦橋を出ていく。
「最悪に近い状態だな」
ノロの言葉にキャミが大きくうなずく。そのとき中央コンピュータの声がする。

「地上では人間同士がいたるところで戦闘状態に入りました。おそらく食料をめぐっての争いが原因のようです」
「バカな」
ノロがぼう然として天井を仰ぐ。
「しかし、殺し合いにはほど遠い状態です」
「どういうことだ！」
「空腹でケンカにもならないようなお粗末な状態です」
「本当に人間はバカになってしまったのか」
時空間移動装置で地上を偵察する宇宙海賊から、人間が地面の上で寝そべってののしりあっているという報告が入る。
「そう言えば、私たちも水しか口にしていないわ」
キャミが急に思い出すとノロもサブスクリーンに映っていたカーン・ツーの顔を思い出す。
「捕虜はどこにいる？」
「医務室です」
ノロはフォルダーが悔しがっている姿を想像して笑いだす。
「ノロ、何がおかしいんだ」
ホーリーがたずねる。

「だって、フォルダーがパンチを繰りだす前にカーン・ツーは倒れているんだろ」
ノロはまだ笑いながら、誰に言うでもなく言葉を続ける。
「腹ペコ同士でケンカしたってどっちも倒れるだけじゃないか。まず、腹ごしらえだ。キャミにごちそうを！イリ、食事の用意だ。あれ、イリは？」
「医務室にいる」
ホーリーがやれやれという表情をしながらノロに伝える。
「あっ、そうか」
「グー」
お腹が鳴ったのはキャミでもミトでもなくノロだった。

＊＊＊

人柄はそれほど悪くはないし、悪口を言ったり迷惑をかけたりすることもない。ただ言えるのは少しわがままなところはあるが決して悪い人間ではない。ただそれだけの人物だと、キャミからノロはカーン・ツーの性格を聞かされる。
ノロはベッドで仰向けになって衰弱したカーン・ツーを見つけると声をかける。
「地球でまともな生活をすると誓うのなら、半永久的に食えるだけの食料を援助する」
「おい、待て」
それまでいきこんでいたフォルダーがノロを制する。

「そんな量の食料は俺たちの惑星にはないぞ。備蓄分を合わせても一千万人もの人間が食える食料は一日どころか一食分もない」
「心配するな」
ノロが口を大きく開けて前歯をすべて見せて笑うとカーン・ツーに確認する。
「どうだ？カーン・ツー」
「その話が本当なら約束する。地球で生活するために努力する」
カーン・ツーが探るような暗い目つきでノロを見つめる。
「もちろん、俺たちも手伝うが、どうだ？」
ノロがカーン・ツー以外のまわりの捕虜にも念を押す。
「わかった。とにかく食料がないからやる気が起こらないんだ」
口々に賛成する者が増える。フォルダーは首を傾げるが、イリが首をたてに振ってノロを見つめる。
「よし、すぐに準備に取りかかろう」
「どうするんだ、そんな大それた約束をして大丈夫か」
カーン・ツーと同じ疑うような目つきをするフォルダーにノロとイリが視線を向ける。
「俺が今までウソついたことがあるか」
「ブラックシャークの試運転に行くと言って俺たちをだましたじゃないか」

「まだ根に持っているのか。とにかく、大型の時空間移動船をありったけ集めてくれ」
「時空間移動船を？」
「百隻はいるなあ」
「そんなに！」
フォルダーが腰を抜かす。イリは控えめにクスクスと笑いだす。ノロがフォルダーの前に立つと下から鋭くにらみつける。
「俺たちは宇宙海賊だ。足らない分は盗んでくるまでだ。用さえ済めば返してやればいい」
「そうだった。わかった！」
しかし、フォルダーはまだノロを疑い深く見つめる。ついにイリがはっきりとした笑い声をあげる。フォルダーが振り返ってイリをにらむ。
「ノロが手持ちの時空間移動船を指揮してとりあえず当面の食料を確保するわ」
「だから、そんな大量の食料をどこで手に入れるんだ！」
フォルダーが大声をあげたときキャミとミトが医務室に入ってくる。イリは声に出して笑うのをやめてキャミとミトに声をかける。
「一太郎も花子もすぐに元気になるわ」
それまで花子のベッドのそばでイリが何を笑っていたのかふしぎそうに見つめていたサーチが、すぐさまイリと同じ言葉をキャミとミトに告げる。

「ふたりともすぐに元気になるわ」
「そうですか、ありがとうございます」
キャミがカーン・ツーを横目でにらむとイリに頭を下げる。
「あっ、紹介するのを忘れていたわ」
サーチがキャミにイリを紹介する。
キャミがイリに向かって頭を下げる。イリも頭を下げるとノロをチラッと見てから、笑顔のままフォルダーに近づく。
「フォルダー、心配しないで。ノロが言うとおり食べきれないほどの食料があるわ」
フォルダーが口をとがらしてノロとイリを交互ににらむ。イリが急に大きな声をあげて笑いだす。
「恐竜のステーキよ」
イリが笑いすぎて涙を流すと胸のポケットからハンカチを取りだす。と同時にノロが大きな声をあげる。
「最高にうまいステーキだ！」
「あっ、そうか！」
フォルダーがそれまでのことをすべて忘れて豪快に笑う。